

ブラジルへ帰国した日系人青年たちのライフストーリー

山ノ内 裕子 (関西大学)

<問題の所在>

日系人の合法的就労を可能にした1990年の出入国管理法改正から、間もなく四半世紀が経とうとしている。1990年以降、多くのブラジル人の子どもたちが親とともに来日し、日本の学校で学ぶようになった。同年以降在日ブラジル人の人口は増加の一途をたどり、2007年には約32万人と最多であったが、翌年秋に起こったリーマンショックと2011年春に起こった東日本大震災の影響で、2013年末には約18万人と減少している。これまでもブラジルへの帰国は見られたが、2008年秋以降、定住すると見られていた在日ブラジル人の多くが、ブラジルに帰国しているのである。すなわち、現在ブラジル国内には、日本での生活歴をもった日系人が多く住んでおり、その中には、日本の学校で教育を受けた経験をもつ、10代から30代の若者が多数含まれている。

では、日本で学齢期を過ごした在日ブラジル人の若者たちは、ブラジル帰国後、どのような人生を送っているのだろうか。また彼/彼女らの日本での被教育体験は、その後のライフコースや進路、文化的アイデンティティの形成にどのような影響を及ぼしているのだろうか。本報告では、ブラジルサンパウロ州で実施した5名の帰国青年へのインタビューの分析を通して、日本で教育を受けた後、日本の公立学校およびブラジル人学校による社会化と進路形成の過程と、彼/彼女らの文化的志向・アイデンティティ形成過程を明らかにする。

なお、報告者はこれまで、在日ブラジル人の子どもたちをすなわち「トランスマイグラント」、すなわち「異なる文化の間をたやすく移動し、二つの国にふるさとを持ち、二つの国の両方に

おいて経済的・政治的・文化的な関心を追求する人々」(Portes 1997:812) ととらえ、ハヤシザキらとともに日本とブラジルの双方で、共同研究^{*}を行ってきた。本報告はその一部である。

<研究方法>

2014年3月、ブラジル連邦共和国サンパウロ州サンパウロ市およびその近郊都市において、5名の日系人青年に対して半構造化インタビューを実施した。また、後述のように、今回の調査対象者は全員、日本語を流暢に話すことが可能であったことから、インタビューは全て日本語で行った。

<調査対象者の概要>

調査対象者は、5名とも日系の親と非日系の親との間に生まれた、メスチッソ/メスチッサ(ポルトガル語で「混血」の意味)の日系三世である。内訳は、男性が2名、女性が3名であり、年齢は10代後半から20代後半である。全員、日本の学校に通った経験をもつが、1名のみブラジル人学校の出身で、残り4名は公立校の出身である。ブラジル人学校へ通った者も含めて、全員が日本語を流暢に話す。調査対象者の詳細については、当日配布の資料を参照されたい。

<分析>

調査対象者5名へのインタビューを分析した結果、以下のような共通点が明らかとなった。

1) きわめて高い日本語力を有しており、ブラジルでは、日系社会もしくは日本人駐在員社会において、日本語を生かした仕事に就いている。

また、5名中3名は、ポルトガル語より日本語の方が得意であると答えている。

2) 日本での生活や経験そして日本のサブカルチャーを肯定的にとらえており、日本への文化的指向性が高い。

3) 片方の親が非日系であるためか、家庭的文化的指向性はブラジルのであり、親も日系社会(コロニア)とは距離を置いている。

4) メスチッソ/メスチッサであるため、日本では「ブラジル人」とみなされてきたが、ブラジルでは、非日系の友人から、「ジャポネース(日本人、日系人)」「ジャパ」等と呼ばれており、また自身もそうしたカテゴリー化を特に否定せず、むしろ肯定的に受け入れている。

5) 親の学歴は必ずしも高いとは言えないが、5名中4名がブラジルまたは日本で大学に進学している(1名が日本、3名がブラジル)。

6) 仕事の都合上、日系社会もしくは日本人社会とつながりはあるが、ブラジル育ちのエリート日系人たちとは、つながりが希薄である。また、日本のアニメや漫画が好きで自発的に日本語の勉強を始めた非日系のブラジル人とも、つながりは薄い。

7) 現在大学在学中の者が3名、既に大学を卒業して働いている者が1名、高校または大学のいずれも進学していない者が1名であるが、全員何らかの形で仕事をもっており、多忙な日常を過ごしている。

8) Facebookを活用しており、ブラジル国内のみならず、日本在住のブラジル人または日本人の友人と、日常的にインターネット上で近況を報告し合っている。

<考察および今後の課題>

調査の結果から、ブラジルへ帰国した日系人青年たちは、自身のエスニシティや日本語力、そして日本での経験を肯定的にとらえ、日本語を積極的に使うことによって、キャリアを形成していることが明らかになった。また、学齢期のほとんどを日本で過ごしたことから、日本の

サブカルチャーに愛着をもち、趣味や嗜好、価値観が一致する同じ境遇の帰国青年との交流を望んでいるが、仕事や学業で多忙な日常生活において、対面での交流は容易ではない。そのため、インターネットのSNSやメッセージ等を駆使して友人と交流を図っていることが明らかとなった。このように、ブラジルへ帰国した日系人青年たちは、まさに「トランスマイグラント」としての日常を生活している。

また、ブラジルでは伝統的に大学は午前または夜間の二部制であり、多くの学生が働きながら学んできたが、近年、学歴志向を受けて比較的入学しやすい私立大学が急増している。そのため、日本から帰国した青年たちも、帰国後、働きながら大学へ進学することが可能となっていることが明らかとなった。

なお、今回のインタビュー対象者のうち4名は、サンパウロ市内の日系団体で勤務している(または勤務していた)者であり、日本語能力が高いだけでなく、日本への文化的志向性も他の帰国青年より高いと思われる。よって今後は、日本語能力の有無や出身学校(ブラジル人学校/公立学校)の違い、日本での居住年数、居住地域の違いなども考慮に入れて、引き続き調査を行う予定である。

<引用文献>

Portes, Alejandro, 1997, 'Immigration theory for a new century: some problems and opportunities', *International Migration Review*, 31(4): pp.799-825.

※本研究は、科学研究費補助金(25285233)の助成を受けて行われた。